

第二部大規模感染症予防・制圧体制検討分科会（第25期・第1回）

議事要旨

- 1 日 時 令和2年11月18日（水）14：30～17：00
- 2 会議形式 ビデオ会議
- 3 参加者(敬称略)分科会委員：小松浩子、高井伸二、相澤彰子、秋葉澄伯、石川冬木、
郡山千早、中川晋一、糠塚康江、平井みどり
オブザーバー：武田洋幸 杉山雄大、加藤茂孝、田中純子、高倉弘喜
事務局：審議第一担当高橋参事官、小川、畔上、穴山

4 議 事

(1) 自己紹介

(2) 委員等紹介、委員長の選出

日本学術会議会則、第二十八条4項に基づき、委員の互選により、委員長に連携会員の秋葉澄伯氏を選出。秋葉委員長の指名により副委員長に連携会員平井みどり氏、幹事に連携会員糠塚康江氏を選出。

(3) 日本学術会議主催、日本医学会連合との合同フォーラムについて協議の結果、

①以下の概要を有力案とする。

開催日時	11月28日（土）午後13:00～17:00（4時間）
開催形式	動画をオンデマンド配信（公開後いつでも視聴可能）又は開催日にプログラムに合わせ動画を公開するかについては引き続き検討する（事前に講演者の意向を要確認、再放送も検討）
視聴対象	一般市民
質疑応答	リアルタイムでの質疑応答はせず、メールやチャットで受け付けた中から抜粋した質問をまとめHP上「Q&A」という形で対応

②フォーラムについて意見交換

- ・第25期としての「決意表明」の意味。
- ・日本学術会議の感染症対策を広くアピールする
- ・国民の不安に対し、体系的で真摯なメッセージを発信することに意義がある。
- ・国民が知りたいこと（「K値」、ワクチン、mRNA、ワクチン後の社会等）を詳らかにする意義がある。
- ・日本医学会連合と日本学術会議の立場から現状分析、各々の方向性を出せるとよい。
- ・1つの意見に集約する必要はない。
- ・感染拡大の危機感が強い都市部の臨床の専門家の話を聞くことは重要。

③開催次第（以下順序等変更可能性有）

司会：岸玲子（日本医学会連合副会長）、
秋葉澄伯（日本学術会議）

- 1) 開会の辞
日本学術会議会長 梶田隆章
日本医学会連合会長 門田守人
- 2) 日本学術会議での提言作成の経緯 分科会委員長 秋葉澄伯
2-1 提言1 郡山千早 連携会員
2-2 提言2 高倉弘喜 特任連携会員
- 3) 日本医学会連合とその加盟学会の活動報告と提案
演者未定
- 4) フォーラム講演者
演者未定
- 5) 総括の言葉： 岸玲子(秋葉澄伯)

上記の開催次第(プログラム)についての意見

- ・4時間(240分)1)~3)で70~80分程度 4)に残り20分×9人程度可
- ・コロナ拡大の時間的経過を秋葉委員長の話で触れてほしい
- ・IT, オープンサイエンスを進めた点を喜連川氏講演タイトルに入れてほしい
- ・他の講演者候補(ウイルス学、ワクチン等)
河岡義裕氏(会員) 脇田隆字氏、黒田誠氏(国立感染症研究所/加藤氏推薦),
中野貴志氏(大阪大)、京都大学ウイルス再生医科学研究所からの誰か。

- (4) 分科会委員の追加
 - ・連携会員神尾陽子氏を分科会委員に追加することが提案され、承認された。
 - ・同じく連携会員喜連川優氏も分科会委員に追加することが提案されたがスケジュールその他の調整のため保留とした。
- (5) 特任連携会員の承認
 - ・特任連携会員として高倉弘喜氏(国立情報学研究所)を推薦する旨提案がされ承認された。
 - ・同じく岡本尚氏(微生物学 名古屋市立大学)が石川会員より推薦、承認された。
- (6) 第一提言の英語版： 原案完成後、現在校閲中である。
- (7) ホームページのUpdateについて： 今後必要改訂とする。
- (8) 今後に向けた問題提起「24期に発出した提言のポイントと25期の課題」
上記の資料を基に以下各出席者の意見交換(発言順)

①PCR検査をめぐる議論、

- ・日本の医療崩壊を防いだ効果と功罪の評価は必要(中川、田中)
- ・臨床的な所見とPCRをやる意味を整理し、国民に知らせる必要はあったのではないか(郡山)
- ・不安原因は信頼できる場所からの統一的情報発信がなかった点。政府中枢機関からの情報発信こそが必要、そこから組織創設へという提案に繋がる(加藤)

②HP公開

- ・この分科会で何もかもやるのは不可能。重要点を議論し学術会議HPに公開するならば、学術会議として議論すべき。この議論を分科会HPに掲載することなら可(石川)
- ・WEB上にQ&A集を作ってはどうか(中川)

③分科会の反省点

- ・Q:「急性期に何もしなかった」という日本学術会議への批判に対し、反省すべき点があるとすれば何か?(石川)
A:専門家が少なく、日本学術会議内の基礎生物学、基礎医学の専門家の間でも、その意識が不足していた(秋葉)
- ・第二部に先見性があれば、秋葉分科会は、より早く立ち上げられたのではないか(石川)
- ・他機関に対して声を上げることはなく、2月段階で欧州の危機に対する認識はまだ不足していた(秋葉)

④21世紀の「検疫の在り方」について。

- ・個々の事例の反省より、むしろ、大量移動が可能となった時代の変化のなかでは、早期かつ広域にわたる対策が普遍的になっていくのではないか(加藤)
(2015のMERS流行例)
- ・検疫の在り方は重要。本分科会だけでなく第二部全体での協力と取り組みが必要(石川)

⑤自民党政務調査会小委員会「提言(末尾参照)」について

- ・ここに書かれている「常置組織」は中央政権的な考え方が強い(糠塚)、
- ・そこに「学会からの修正を要する点」を取り入れてはどうか(中川)

⑥首都封鎖

- ・医療崩壊を起こさなかった点は評価(中川)

⑦休校の在り方

- ・反省点は全国一律で行われた点。運営は地域の事情に合わせ、柔軟性がなければならぬ(加藤)

⑧私権の制限と医療資源確保

- ・台湾の例(末尾参照)。必要医療資源を確保し、物資と流通の全体をITで早期管理するシステム構築が問われている(加藤)

時間不足のため、医療体制(提供、供給)についての議論は次回以降に行うことになった。

(8) 今後の分科会の進め方について

- ・11月28日開催フォーラムについての相談過程で今後の予定を検討していきたい
- ・将来的に梶田会長と門田氏、石川連携会員と朝長氏との対談を企画してはどうか
- ・今後の提言「薬学・獣医学・看護学も含めた人材養成」を課題とし、提言の形になるように意見をまとめていただきたい(できれば年内)

- ・今後の分科会では喜連川氏に講演を依頼する。
- ・「日本学術会議の在り方論」について、日本学術会議が研究機関ではなく、どのような機関であるべきかを各自に考えて頂きたい。コロナ禍を通して出てきた各論点を通じて、他機関がやっているようなことをやるのではなく、日本学術会議のあり方を常に念頭に置いた形で活動をしていく必要がある

(9) 参考HP

- ・台湾の対策について
https://project.nikkeibp.co.jp/mirakoto/atcl/global/h_vol13/?P=1
- ・自民党新型コロナウイルス関連肺炎対策本部感染症対策ガバナンス小委員会提言
<https://www.jimin.jp/news/policy/200661.html?fbclid=IwAR34hmnx5KwP058MhDSWqh0QSD25wWK3S0zL1VjvFTH91Diu4w3Yp1hdOE>

－ 以 上 －